



純白

雨野 小夜美
(あめの こやみ)

こやみ

ここは とある王国
わがまま放題のお姫様は
毎月 ドレスを15着 買っていました
お菓子といえば
イチゴやチーズケーキ チョコ マカロン
フルーツたっぷりの 大きな大きなタルト

家来たちは皆 あきれていました
でも誰も何も言いませんでした
お姫様にさからうのが 怖いから

お姫様は 夜が大キライでした
ドレスもお菓子も 色をうばわれて
ただ 真っ暗な部屋で 眠るだけだからです

眠れない日は よく二階のテラスで
色で汚れきった夜にさわってみます
「いつか わたしは
この王国にとけて 消えてしまうだろう」

ある家来が言いました

「お姫様

ドレスよりお菓子よりもっと

おもしろいものがこの中にありますよ」

その家来は 厚い本をバサッと ひろげてみせたのです

お姫様には 何がおもしろいのか

見ただけでは まったくわかりませんでした

家来たちは皆 かわいそうな目で その人を見ました

その家来は 厚い本を

「夜のキレイなお姫様に」と

毎晩もってきて

読んできかせてくれるようになりました

お姫様は はじめは眠いだけでしたが

しだいにその本のおもしろさが わかるようになりました

外の世界には ドレスやお菓子ではない

もっとおもしろいものがあるそうです

赤や黄色のしっぽをつけた魚
人々が見上げるような巨大な石
夜空を飛ぶカーテン
お姫様は そのお話が とてもおもしろくて
その人が去ったあと
とてもよく眠れるようになりました

ある日その人は

「外にとてもすごいものが降っていますよ

お姫様 見に行きませんか」

そうお姫様をさそいました

「ただ 雪が降っているだけなのに」

お姫様は思いました

重い扉をあけたら
庭にあるのは とてもとても白い床でした
その人は はだに冷たい
降りこんでくるひとつぶをすくって
「これが雪というものですよ」
と お姫様の小さな手にのせました
「お姫様 雪とはけっして
窓の外に降っているものではありません」
手のひらの温度でとけていく
これが 雪

まっ白の床を
色とりどりの足跡で汚しました
ドレスで走って 転びました
それでも降りつづく 雪というもの
まっ白の床はまっ白のまま
まっ白 それは お姫様がはじめて見た 希望の色でした

しかし その人は
ある晩 急にこなくなりました
お話も 読んでもらえなくなりました
それもそのはず
その人は 亡くなってしまったのですが
いじわるな他の家来たちは
お姫様に教えなかったのです

お姫様は毎日 夜が来るたび

その人を待ち続けました

答えを知りたいと願う 小さな白

他の家来たちは しめしめと思い

つぎつぎに「本を読んであげます」と名のり出ました

お姫様は 彼らの表情をけっして

受けつけることはありませんでした

お姫様はなぜ その人と会えないのか
さみしくて さみしくて
ペンをとり お話を書くようになりました
最初は お話とも呼べないようなものを書いていたのに
だんだん うまくなっていきました
自分に夜 読んであげるためのお話
読みながら泣くばかりでした

あるとき お姫様は
できたお話を家来たちに見せました
そして そのお話を
あの人に見てほしいと言いました
「今どこにいるのか」と
そのお話はとても
家来たちの心をうちました
お姫様は外の世界のことなど知らないので
ただ「あの人に会いたい」と書いていただけ
それが 悲しくて
家来たちは仕事が終わって
家に帰って泣きました ある家来は仕事をやめました

見つめるほどまっ白なお姫様は
知らなかった自分の気持ちを ノートへ映すようになりまして
ドレスもお菓子も すっかり忘れて
毎日同じような服 同じようなものを食べて
机に向かうようになりまして
どれも言いたいことは同じでした
お話というより叫んでいるだけ
でもそれが家来たちからしだいに まずしい人々へとひろがり
王国中の人々の心をうちました

その冬 王国に病気がはやり
たくさんの人々が苦しみ 亡くなりました
お姫様は 「苦しんでいる人のどこかに
あの人がいるのでは」と思い
病気の人々を 自ら手当てしはじめました
家来たちは 皆止めました
そのころそういう仕事は とても身分の低い人の
きたない仕事だと思われていたのです
でもお姫様はもう きこうとはしませんでした
もしあの人はまだ この病室のどこかにいて
きつといて きつといて
苦しんでいるかもしれないから…
燃えるような白の中
ちっぽけな手を のばしてさぐっているだけ

お姫様はいつか

皆が見上げる 立派な女性になっていました

たいしたものも着ていない 食べていないのに

すてきなお話を書くからです

「あの人に会いたい」だけだったお話は

少しずつ ひろがってゆきました

まずしい家庭の親たちは

なんとかして働いて その本を手に入れて

子どもたちに読んできかせました

もっとまずしい親たちは 文字を読める人に頭をさげて

子どもたちに読んでもらいました

春になって お姫様は告げ口で
あの人もういないことを知りました
厚い本もこっそり 手わたされました
お姫様はとても 悲しんで泣きました
しかし お姫様にとって あの人もう
遠いあこがれの人になっていました
もう どこかで知っていたのです
あの方は きっとあの方は
少なくとも この国には いないのだろうと

インクで汚れたまっ白な手のお姫様は
毎日机に向かい お話を書きました
王国中の人々が それを読み 泣きました
とてもすばらしいお話はやがて
他の国へもひろがってゆきました

お姫様は やがて こう思うようになりました
いつか ずっと前
わたしにまっ白をくれたあの人のように
「心が汚れてしまった誰かに
お話を まっ白な光をささげるのが
わたしの希望 存在理由」

女王になる前の夜 お姫様は
お花畑の中で 泣いている夢を見ました
とび起きたら机の上に あのボロボロの厚い本
理由が見えなくなった時にだけ
その本をのぞきこむのです
「影より大きくなりすぎた
わたしは今でもまっ白か」と

純白

<http://p.booklog.jp/book/112054>

著者：雨野 小夜美

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tinycolor/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/112054>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト